

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT

2012.5. VOL.18

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

病院東棟に「喜谷記念がん治療センター」が開院します

病院東棟「喜谷記念がん治療センター」は、昨年5月から起工し今年1月に竣工した地上2階建ての施設です。

この東棟は、社会の高齢化に伴い年々増え続けるがん患者さんに対し、高度な診断や様々な先端治療を併用する「集学的な治療」を行い、今後の医療の発展に寄与しようとするものです。

さて、東棟の整備費については、病院の診療収入と目的積立金のほか、「喜谷記念トラスト」からの寄附金が充てられています。

喜谷記念トラストとは、白金錯体抗がん剤であるオキサリプラチンの開発者である本学元薬学部長の故喜谷名誉教授が、その特許料等を原資として設立したものです。

今回、故喜谷先生のご厚意に感謝の意を表すため、東棟の呼称を「喜谷記念がん治療センター」と命名させていただきました。

この喜谷記念がん治療センターには、がん診断や放射線治療のため、最新鋭の機器を導入しました。

まず、1階には国内で19台目、名古屋市内では2台目となる「3T MRI」を設置し、大きな内径はMRI検査時の閉塞感を軽減し、また、高度な脳機能解析などにも威力を発揮するものです。

また、リニアックの一種である「トモセラピー」は、全国で30台弱導入されていますが、当院のトモセラピーは、中でも最新鋭機を取り入れ、国内導入実績は3台目、大学病院では1号機となります。機能としては、画像誘導放射線治療が可能な、ヘリカル照射方式の強度変調放射線治療 (IMRT) 装置で、従前の機器よりもさらに精度を高めた照射・治療ができます。

2階には、快適な環境で、リラックスしながら治療を受けていただけるよう、ゆったりとした空間の「化学療法室」を、がんの患者さん・ご家族が、体やこころのつらさなく過ごせるようなケアを提供する「緩和ケア診察室」を設置しました。

西日本で初の、「より正確性・安全性の高い調製の実現」や「調製者の安全性の確保」などの利点がある「抗がん剤自動調製装置」も導入しました。

このように「患者さんとの二人三脚の治療を進める拠点」として喜谷記念がん治療センターを整備しました。

この5月1日より開院いたしますので、皆さまのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

文責：病院長 城 卓志



最新鋭の「トモセラピー」を導入(東棟1階)



西日本初の「抗がん剤自動調整装置」(東棟2階)



東棟「喜谷記念がん治療センター」(手前)
と病棟・中央診療棟

「瑞医の由来」

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

小牧市民病院

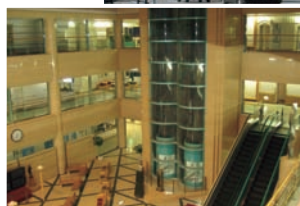
尾張北部医療圏で唯一の救命救急センターを持ち、またがん診療連携拠点病院である当院は、以前から救急医療、がん診療、高次医療を3本柱とした地域医療を提供してきました。本年4月から今までの急性期病棟に加え14床の緩和ケア病棟を増設して病床数は558床になりました。終末期であってもゆったりとした環境の中で患者さん、ご家族の方の支えとなり、納得して頂ける医療を提供することを目指しています。

今回DPC対象の1505病院に対し医療機関群の分類が行われ、I群の大学病院本院80病院に次ぐII群の高次機能病院90病院に当院も認定されました。認定されたことで職員の士気も高まりましたが、今後もII群に相応しい病院として地域の医療機関との関係を深め、高度で質の高い医療を提供すること、研修医を始め医療スタッフの育成に努めたいと考えています。



小牧市民病院 院長 末永 裕之

豊橋市民病院



当院は一般病棟811床、結核病棟、感染症病棟を含め合計836床を有します。救命救急センター、災害拠点病院、地域がん診療連携拠点病院、周産期母子医療センター、DMAT指定医療機関等に指定されています。東三河唯一の三次医療機関であり、症例は豊富で、ほぼすべての疾患を対象に高度な医療を提供するとともに、他の医療機関との連携を図りながら基幹病院にふさわしい役割を果たすべく努力しています。

また基幹型臨床研修病院として、毎年多くの初期研修医を、さらに名市大からは学生の臨床実習や後期研修医の臨床研修も受け入れています。人に優しい思いやりのある心を大切に、市民の病院として広く地域住民に頼りにされる病院でありたいと願っています。

豊橋市民病院 院長 岡村 正造

教育

M6選択制BSL — 医師への道 最終章 —

5年生における臨床実習(BSL: bed side learning)が終わると、いよいよ医学部の最終章である選択制BSLが始まります。5年生で身に付けた知識、技能、社会性をさらに磨くためのより実践的な実習であり、医療チームへ参加が求められることになります。

主な実習場所は、当学に関連のある病院、名市大病院(M5で実習できなかった診療科)、病院病理部、名古屋市内の開業医などであり、多くの先生方のご協力をいただいております。関係各位に心から感謝を申し上げます。

具体的には、開業医においては初期診療や慢性期診療を、急性期病院においては先進医療や専門的医療を実習します。これらのどちらが欠けても良い医師とはいえません。医師としての土台である一般的な疾患や全身管理を学び、さらに専門的な医療を学ぶことで、バランスのとれた優れた医師として認められるのです。

これからも名市大医学部は、患者さんに愛される医師を育ててまいります。

文責:BSL小委員会 祖父江 和哉



(24年 M5 白衣授与式の様子)

研究者紹介



Yoshitaka
Maeno

前野 善孝(まえの よしたか) 法医学(准教授)

専門:法医学、法中毒学

近年、薬物乱用の状況は多種多様で巧妙なデザイナードラッグにより法律の規制が追いつかないのが実状であります。しかしながら、所属する法医学実務においては、これらの乱用薬物による中毒死事案や犯行手段として使用された薬物を正確に定性・定量し、薬物と各事例との因果関係を説明しなければなりません。ご遺体から抽出した微量サンプルからGC/MSやLC/MS/MSを用いて迅速かつ高感度に分析する方法の検討を行っています。また一方では、シンナーや覚せい剤、MDMA、コカインなどの薬物の単独、あるいは併用した乱用で急死をする事例の中に、心病変を伴うことが報告されており、その機序を解明するため単離培養心筋細胞を用いた基礎研究を行っています。

近年の論文:Leg Med (Tokyo). 13: 191-195(2011), Prostate. 69:644-51(2009), Am J Physiol Heart Circ Physiol. 294:H121-33(2008), Forensic Sci Int. 168:27-33(2007).



Emi Nishida

西田 絵美(にしだ えみ) 加齢・環境皮膚科学分野(助教)

専門:光線療法、皮膚免疫学

近年、分子標的治療薬は新たな治療法として様々な疾患で使用されてきておりますが、その中でも乾癬の治療はここ数年で大きく変貌しました。そして、これらの臨床での効果から乾癬のメカニズムの解明が進んできました。しかしどういった病型の人で生物製剤が有効なのか、効果がでにくいのか、また他の治療が有効であるかといったことを推測することはできません。そのため我々は多くの乾癬患者から得た情報からさらなるデータ解析を行い、病型や病態に応じた治療ができるよう研究を行っていききたいと思います。

近年の論文:Photodermatol Photoimmunol Photomed. 27(5): 248-50 (2011), Immunol Lett. 136(2): 163-70 (2011), Immunol Lett. 121(2): 97-104 (2008), Immunol Lett. 121(1): 27-32 (2008)



Noritaka
Aihara

相原 徳孝(あいはらのりたか) 脳神経外科(病院准教授)

専門:脳腫瘍、血管内治療

脳腫瘍では、特に髄膜腫や聴神経腫瘍の治療にあたっております。脳腫瘍手術において、患者の機能予後を悪化させる原因の多くは、術後の脳神経障害です。そのため、脳神経機能を温存して脳腫瘍を摘出することは、脳神経外科医にとって重要なテーマです。神経モニタリングは、術中の神経損傷を未然に防ぐ可能性があり、新しいモニタリングの開発や工夫について研究しております。血管内治療では、日本脳神経血管治療学会専門医として、カテーテルを用いて脳動脈瘤塞栓や内頸動脈狭窄に対する血管形成・ステント留置などを行っております。新しいデバイスの開発とともに、従来困難とされていた部位への治療・適応を研究していきたいと考えております。

近年の論文:Acta Neurochir 153:2219-23(2011), 脳神経外科速報21: 614-620 (2011),Skull Base19:325-332 (2009)、脳腫瘍の外科 186-191(2009)、Acta Neurochir Supple 104:343-345(2008)



Katsumi
Fukamachi

深町 勝巳(ふかまち かつみ) 分子毒性学(助教)

専門:分子毒性学

遺伝子改変「ラット」短期発がんモデルを用いた発がん研究を行なっています。ラットは腫瘍学、毒性学などに多用されていますが、遺伝子改変に関しては早くにES細胞が樹立されたマウスに遅れをとっていました。最近になりようやくラットES細胞が樹立されたことや、人工ヌクレアーゼにより遺伝子改変が容易になったことからノックアウトラット作製が報告されるようになってきました。これまでに、遺伝子改変短期発がんラットとして乳発がん高感受性ラットや化学発がんでは発生させることが困難な膵管がんモデルラットを確立しました。試験期間の短縮は費用削減にもつながります。ヒトへの応用を視野に、これらラットを用いて、発がん機序の解明・早期診断法の開発を目指しています。

近年の論文:Pancreas (in press), Biochem Biophys Res Commun 417:1074-1079 (2012), Food Chem Toxicol 49:1298-1302 (2011), Cancer Sci 101:341-346 (2010), Carcinogenesis 31:927-935 (2010),

新任教授のご紹介

生物化学分野 — みち かわ まこと 道川 誠 教授



道川 誠 教授

Q: 今後の抱負をおねがいします。

この度4月1日付けで、本学大学院医学研究科生物化学分野の教授を拝命いたしました。本学発展のため教育ならびに研究発展に微力ではございますが精一杯尽力して参る所存ですので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。私は、茨城県に生まれ、東京医科歯科大学医学部を卒業後、神経内科に入局しました。神経内科で臨床医として7年間の研鑽を積みながら、研究ではヒト生検した筋細胞の培養系を使った神経筋疾患のメカニズム解明に電気生理学ならびに生化学的アプローチから取り組んで来ました。その後カナダへの留学を経て、1996年に国立長寿医療研究センターに室長のポジションを得て、アルツハイマー病の分子病態解明と治療法開発に関する研究を開始いたしました。2005年からは部長として研究部を率いて参りましたが、この度縁あって本学医学部の一員とさせていただくことになりました。臨床と基礎研究を行ってきた人間として訴えたいことは、臨床医にとって疾患を分子レベルで見て考える態度ならびに科学的に洞察する力、論理展開力を身につけることがいかに重要かということです。将来優れた臨床医になるためには、若い一時期に基礎医学の教室で研究実践を行い、論理的な思考方法を習得するとともに、柔軟な発想で行う自由闊達な議論を経験してもらいたいと思います。学問をしたい学生諸君は、当教室の門を叩いてください。お待ちしております。

実験病態病理学分野 — たか はし さとし 高橋 智 教授



高橋 智 教授

Q: 今後の抱負をおねがいします。

本年1月1日付けで実験病態病理学分野(旧病理学第一講座)の教授を拝命致しました。教授に着任する前は病院病理部に6年9ヵ月在籍し、それ以前にも名古屋市立東市民病院(現・名古屋市立東部医療センター)病理科に4年2ヵ月勤務するなど臨床病理に深く関わってきましたが、主たる専門は実験病理学です。その中でも動物を用いた発癌研究、特に発癌に関わる修飾要因を解析し、癌の発生、進展過程に阻害的に作用する物質を見いだす事で癌の抑制・予防因子を探求してきました。現在は前立腺癌を中心に研究を行っています。前立腺癌は世界的に男性癌の中で4番目に多い腫瘍で、日本では2020年になると肺癌ついで2番目の罹患率になると予測されています。その発症には食事要因が強く影響していると考えられており、世界的に前立腺癌に対する化学予防研究が盛んに行われています。癌化学予防は癌治療とは異なり、癌の発症を防ぐあるいは遅延させることを目的とした研究領域で、日本ではまだその概念が充分には浸透していません。今後は名市大発の前立腺癌化学予防剤が確立できるよう頑張りたいと思います。御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

02 時の人 People in the news

腫瘍・免疫内科学分野 — 新実 彰男 教授



新実 彰男 教授

Q: 今後の抱負をおねがいします。

本年3月1日付けで腫瘍・免疫内科学分野を担当させて頂くことになりました。私は昭和60年に京都大学を卒業し、医師としてのキャリアの殆どを京都で送って参りました。名市大に移ってから2ヶ月が過ぎましたが、教室員をはじめ皆様に暖かく迎えていただき、とても嬉しく思っております。私の専門は呼吸器内科ですが、教室の先々代に当たり著名な呼吸器内科医であられた故山本正彦教授とは私の元上司が懇意にさせていただいていたため、名市大には当時から親近感を持っておりました。呼吸器疾患の患者が増加している一方で、本邦では呼吸器内科医の不足が指摘されています。教室の伝統を生かして呼吸器内科医を一人でも多く育成し、大学、関連病院ともに呼吸器内科医を充足させることは私の大きな責務と考えております。また先代の上田龍三教授が基礎を築き上げられた腫瘍領域に加えて、私が専門とする喘息・アレルギーなど他領域にもできるだけ幅広く取り組み、診療現場のニーズに応えられる呼吸器内科を作っていきたいと思っています。さらに血液内科、膠原病内科グループをも擁する教室全体を一層発展させ、教育や地域への貢献にも注力して行く所存です。皆様のご指導、ご支援を宜しくお願い致します。

名誉教授のご紹介

小鹿 幸生 名誉教授



小鹿 幸生 名誉教授

1971年名古屋市立大学をご卒業され、故滝川清治教授が主宰された旧第二内科に入局された。その後、名古屋市立東市民病院(現東部医療センター)神経内科(阿部鏡太郎部長)、公立陶生病院(河野親夫部長)にて神経内科学を学ばれました。1980年からBaylor医科大学神経内科(Stanley H. Appel教授)に留学され、1992年にHippocampal Cholinergic Neurostimulating Peptide (HCNP)を発見され、本ペプチドおよびその前駆体蛋白が記憶に重要であること、アルツハイマー病病態に関連していることを明らかにされました。2001年9月神経内科学講座の初代教授に就任され、学生教育・臨床・研究と後進の育成にご尽力されました。現在までに教室運営も軌道にのり、今後も発展すべく礎を築かれました。更に、2006年本学の独立法人化に伴い、副学長・理事(病院担当)として、組織改革・病院経営改善にご尽力され、その功績は多くの方々にご評価頂いております。

研究と名古屋市立大学をこよなく愛し、何事に対してもいつも直球勝負で手を抜かない心を、後進である神経内科学研究員・市大学生にご指導されました。

また、今後も大同病院臨床研修センター(総合内科主任部長)にて研修医教育を精力的に続けられます。

文責：神経内科学 准教授 松川 則之

名市大のチーム医療 第2回 NST(栄養サポートチーム)

NSTとはNutrition Support Teamの略で、栄養治療をチーム医療の一環として活動する栄養サポートチームのことです。栄養を摂取できない時、食事の量が減ってきたなどという問題が生じた場合、その原因や状態を把握し、適切な処置を行い、栄養管理をします。栄養状態が悪いと、治療に難渋し、回復も遅延します。また手術後に感染症や合併症を起こしてしまうこともあります。

Nutrition Support Teamは、1970年米国のボストンで誕生しました。その後、NSTは全米に広がり、さらに他の欧米諸国へと急速に伝播していきましたが、1997年までは本邦において、わずか数施設にNSTの設立が確認されているにすぎませんでした。

しかし、1998年、欧米型の専属チームにとらわれないわが国の医療状況に即した新しいNSTの運営システム”Potluck Party Method (PPM:持ち寄りパーティー方式/兼業兼務システム)”が考案され、これを契機にわが国でも本格的な全科型NSTが設立されるようになりました。その後、NST活動は全国に広がり、現在、既に1,500以上の施設にNSTが設立され、今もなお多くの施設で稼働準備が着々と進められています。当院においても、2006年7月に準備委員会設置し、10月より活動を開始いたしました。NSTの構成メンバーは、病態管理をする医師、患者様の1番近くにおいて患者様を1番理解している看護師、食事について摂取量やカロリーの計算を行い、栄養管理を行う管理栄養士、薬についての管理を行う薬剤師、また、言語聴覚士や臨床検査技師など各専門分野のスタッフから構成されており、それぞれの立場から知識や意見を出し合って、個々に対する栄養管理を行います。実際の活動内容としては、入院時の栄養スクリーニングを基に、栄養アセスメントを実施します。栄養管理が必要かどうか栄養状態を評価し、栄養管理が必要と思われる患者様に対しては、主治医からの依頼を受け、週1回ミーティング、週2回のチーム回診を行い、最善の栄養管理の方法を検討・提案します。また、臨床経過を見ながら栄養状態を把握し、再評価・検討、提案をしていきます。前に述べたように、栄養状態が悪いと、肺炎などの感染症を引き起こしたり、褥瘡ができてしまうこともあります。また、癌の末期の患者様では、栄養を摂取していても、諸治療により体力が落ちてきたり、体重が減少したりすることがあります。このような患者さんに対しては、感染対策チーム、褥瘡対策チーム、緩和ケアチームなどの他のチームとともに、最善の治療を提供できるように、連携をしながら活動を行っています。

さらにNSTは栄養管理に伴う合併症を予防・早期発見・治療するといった役割も担います。また、NSTには栄養管理の指導をする役割もあり、院内講習会を開催したり、勉強会を行い、病院スタッフ全員が栄養管理を学び、より質の高いケアを患者様に提供できるようにしています。これらの活動を通じ、患者様の栄養状態の評価・判定を行い、適正な栄養補給を実施することで、栄養状態の改善をはかり、質の高い医療を提供できるように活動していきたいと考えております。

文責:消化器外科学 助教 小川 了



左から 鈴木管理栄養士、嘉村管理栄養士、栗本師長、
那須薬剤師、小川臨床栄養管理室副室長（消化器外科学 助教）

地域貢献・地域活動

名古屋市立大学健康科学講座 オープンカレッジ(2012年第1期)が始まります

生活と毒性学の関わりー毒を知って安心・安全な生活

毒性学は基礎から臨床医学まで極めて広範な分野をカバーしています。例えば、食品毒性学、職業毒性学、遺伝毒性学、毒性病理学、法医毒性学、臨床毒性学、中毒学、薬物動態学、毒物動態学などがあります。毒性学の現実的な役割は環境に存在する化学物質などの人への影響評価、安全性評価を行い、評価結果を一定の基準値につなげることです。これを行政毒性学(レギュラトリートキシコロジー)と呼んでいます。講義では毒性学がカバーする各分野の専門家を招き、普段の生活に役立つ情報をわかりやすく解説してもらいます。 実施期間6月1日～7月20日

講座詳細はこちらからオープンカレッジHP (<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/philanthropy/opencollege.html>)

文責:コーディネーター 分子毒性学 教授 酒々井 眞澄



名市大 医療・保健 学びなおし講座(2012年春期)が始まりました

名市大 医療・保健学びなおし講座は、この4月から5年目に入りました。これまでの受講者からのご意見、講師の先生のアイデアを取り入れ、臨床シミュレーションセンターのご協力の下に、今年度は、これまでより、さらに実践的かつ高度な内容を目指し講座を企画しました。既に始まっている春期講座では、100名近くの方が仕事の終わった午後6時30分から熱心に受講されています。秋期(9月～12月)も受講者募集中ですので、学びなおし講座事務局までお問い合わせ下さい。 学びなおし講座HP (<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/manabi/>)

文責:コーディネーター 分子神経生物学 教授 浅井 清文

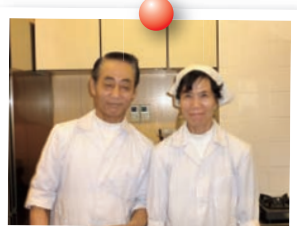


シミュレーションセンターでの実習は受講生より大変好評です。

桜山の懐かしのお店紹介ー第12回「好陽軒」さん



メンマ山盛りのスペシャルメンマです。



ご夫婦のお見送りの挨拶が微笑ましいです。

“汁残しちゃダメダメ”こんな懐かしい言葉が頭の中を巡りながら、久しぶりにスペシャルメンマを食べていた。見た目よりボリュームが多いメンマにびっくり仰天。大食漢の私も腹一杯である。主人の勧めにより、1/3を食べたらごまラー油?を入れその風味を味わう。さらに1/3を食べたら人参エキス入りの酢をお好みで入れた。なるほど、あっさり系の汁から段階的に風味とその味を楽しめる。減塩が進められる今、汁を飲み干すことをわざわざ勧めていないそうだが、強烈な記憶がよみがえり、ラーメンの命を一気に乾杯。25年経っても夫婦仲良く、一安心。

文責:脳神経生理学 教授 飛田 秀樹





産科婦人科学分野 杉浦 真弓 教授が 平成23年度 産科医療功労者厚生労働大臣表彰を受賞しました。



このたびは産科医療功労者として厚生労働大臣表彰をお受けすることになりました。身に余る光栄と存じます。

私は1990年の緑市民病院在職中から一貫して不育症、習慣流産の臨床研究に取り組んでまいりました。名古屋市立大学は習慣流産研究の伝統があり、その伝統を踏襲して研究を始めました。

不育症の原因は抗リン脂質抗体、子宮奇形、夫婦染色体異常などと考えられてきましたが、2000年には世界で初めて胎児染色体異常が不育症原因の約半数を占め、過去の流産回数が増えると出産率は低下し、胎児染色体正常流産が増えることを発表しました。また、2004年には夫婦染色体異常を持つ場合、受精卵診断のような高度先進医療に頼らなくても約7割の患者さんが出産に至ることを発表しました。子宮奇形に対して従来は手術を実施すると教科書にも書かれていましたが、2010年に約8割の患者さんが手術なしでも出産できることを発表しました。子供を得るために、とすれば自分の体を痛める治療に走りがちな不育症患者さんに対し、精神的支援を行いながら、より侵襲の少ない、より経済的負担の少ない治療を提供してきました。2010年には治療をしな

くても85%の患者さんが出産に至ることを発表し、厚労省の研究助成をいただき、ポスターを作成し患者さんや医師の啓発に努めました。

不妊症も流産も女性の加齢が危険因子であり、20代前半では6%の不妊症が40代では64%になるという、産婦人科医にとって常識的な生殖知識を我が国の一般女性は知りません。キャリア維持のために出産を先送りにして後悔する不妊、不育患者さんが後を絶ちません。最近では、女性の健康週間での市民公開講座において「哺乳類としての妊娠適齢期」という講演を継続して、子どもを持ちたい女性が妊娠能力を失うことがないように啓発活動を行っています。

私が研究を継続できたのも同僚や研究仲間、愛知県の産婦人科医師の支援のおかげと心から感謝しております。

我が国の合計特殊出生率は1.4前後を推移しております。産みたい人が産む。それが真の少子化対策、との信念を持って、今後も研究活動、啓発活動に尽力したいと思います。



教授に就任される先生方のご紹介

ますますのご活躍をお祈りしています!

新生児・小児医学
加藤 稲子 先生

埼玉医科大学総合医療センター
総合周産期母子医療センター
新生児部門 教授

腫瘍・免疫外科学
山下 啓子 先生

北海道大学
乳腺・内分泌外科 教授

腎・泌尿器科学
小島 祥敬 先生

福島県立医科大学
泌尿器科学 教授

麻酔・危機管理医学
薊 隆文 先生

名古屋市立大学
看護学部
病態学 教授

【医学振興】寄附金ご協力のお願い

本学は、平成18年4月、公立大学法人として新たな一歩を踏み出し、教育・研究活動をより一層活性化させるための財政基盤の確立を目的として、同年8月「公立大学法人名古屋市立大学振興基金」を設立いたしました。本学に課せられた使命を着実に果たしていくためには、優れた教育・研究・診療環境の整備、充実が必須であり、広く皆様からの財政的ご支援をお願いしてまいりたいと存じます。

なお、これまでに寄せられたご寄附は、既に研究棟の改修や身障者用トイレの設置等、環境整備のために有効に利用させて頂いております。

皆様におかれましては、この基金の趣旨をご理解いただき、「市立大学振興基金(医学振興)」に、ご賛同賜りますようお願い申し上げます。

※寄附金については税制上の優遇措置が設けられております。詳しくは、下記担当までお問い合わせください。

問合せ先 ご賛同いただける方にはご案内をお送りします。

名古屋市立大学 医学部事務局 市立大学振興基金【医学振興】担当
TEL:052-853-8077(土・日・祝日を除く9:00~17:00) FAX:052-843-0863

広報誌：瑞医(ずいい)

発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
TEL(052)853-8077 FAX(052)842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp>

※次号の発行は平成24年9月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☒
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp または医学部事務局 広報担当まで